
銀砂雪《あかいゆき》

赤色るべら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あかいゆき
銀砂雪

【Nコード】

N2272Z

【作者名】

赤色るべら

【あらすじ】

雪が、しんしんと降り注ぐ中、傭兵ジオラートは、吸血鬼が棲む廃墟に向かって続く路を歩いていた。

「退治してくれ」と言う依頼のもと、刃を握り締めて会いに行く吸血鬼は、かつて傭兵団に所属していた頃、思い出に残る場所を滅ぼした存在だった。

その街で出会った一人の少女の事を思い返しながら、ジオラートは考える……「今夜は『赤い雪』が降りそうだ」と。

一・砂へスナツフ

今宵の雪は深い。

そんな中、滅ぼされた街の残骸へと向かって、赤銅の髪の男が歩いていた。

「その街を滅ぼしたモノを退治してくれ」と言う依頼のもとに。今はそこを住処にしている、その魔を斬りに行くのだ。

雪は止む気配を見せず、音も無く積もって行くばかり。

白く霞む世界の中、彼は、一つの声を思い出した。

《そんな顔してどうしたのよ、赤い雪が降るんじゃない？》

そう言った少女の、屈託の無い笑顔が脳裏に蘇る。

立ち止まって空を見やれば、雪は闇になお青白く、空は重鈍く、遠くなった街や木々の陰は深い黒で塗りつぶされたままだ。

何処にも、赤い色などは見当たらない。

それでも、

(今夜は降りそうだな、『赤い雪』が)

それでも彼は、そう思った。

腰に吊るした短剣は、背負った両手剣よりはるかに小ぶりなのに、いやに重い。

冷え切った短剣の柄尻が、身につけた革鎧の金具と擦れ合って、軋むような音を立てている。

だが今は、その音すら吸い取る程の静寂の方が耳に痛い。

……緑色の目を細める。

もうすぐ、あの残骸と化した地が見える筈だ。

あの地に在るはずだ。

いつ会っても、油彩と柑橘の香をさせていた少女の名残が。

少女が描いた油彩に残されていた風景が。

彼女と出会って別れたあの地を、壊滅させた吸血鬼が。

「十年なんぞ、あつと言つ間だよな、まったく」

目に見えるため息と共に、吐き出されたばやきの言葉。

廃墟となった街の、かつての姿を思い返して、彼は冷たくなった
剣柄を握り締めた。

雪は、さらさらと折り重なって行く。

時計の砂が、落ちて行くように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2272z/>

銀砂雪《あかいゆき》

2011年12月8日01時48分発行